

第三十回企業活性化研究分科会・議事録

〈第三十回 2010年4月24日(土) 時間:13:30~15:30 於:専修大学(神田校舎)〉

1. 参加者:魚谷、大野、木村、齋藤、杉本、中村、古山、星野、松本、宮川、山本、横山、渡邊

2. テーマ:企業活性化に関する研究

3. 発表内容

テーマ①:『“Turnaround Strategies” by Charles W. Hofer』についての英訳および検討

・報告者:齋藤幸雄(専修大学大学院)

4. 発表内容

テーマ②:『粉飾企業の分析』

・報告者:星野敏之(株式会社 耕徳)

・配布資料:8枚

・報告内容の要旨

本報告は、平成19年1月に民事再生手続を開始した株式会社アイ・エックス・アイ(以下、同社という)の粉飾について分析したものである。同社は、架空循環取引により売上高の過大計上や在庫の架空計上などをおこなっていた。

本報告では、まず、同社の粉飾を明らかにするために、売上高の推移と売上債権、棚卸資産の回転期間の推移に特に着目し分析している。同社の売上高は急上昇しているが、それに見合う売上債権の増加が見られえないという異常があったものの、売上債権回転期間の数値には異常値がなかった。次に、原価率の推移と棚卸資産の回転期間から分析している。同社の公表した有価証券報告書によれば、事業の全体的な方向性はコンサルタント業務への移行であるが、原価率の推移と棚卸資産の回転期間の分析により、実際には、商品販売を中心とした事業活動が行われていたと推察できる。最後に、営業キャッシュ・フローによる分析を行っている。同社は、各年度とも利益を計上している。一方、営業キャッシュ・フローの金額はマイナスとなっている。このようなキャッシュ・フローの状況は粉飾企業に多くみられる傾向である。

本分析では、売上高の推移、各種回転期間、原価率、営業キャッシュ・フローの状況から企業の粉飾を推測している。

(文責:齋藤幸雄)